

令和元年度 大阪市立中学校教育研究会特別支援教育部

研究主題

子どもたち一人一人が、共に学びに向かい

生きる力を育む教育をめざして

趣旨

「障害者権利条約」の批准に伴い平成28年4月1日「障害者差別解消法」が施行されました。学校現場でも「合理的配慮の提供」が義務付けられ、障がいのある生徒への理解と支援が教育活動全体に求められています。

また昨年度、新学習指導要領が実施となり、すでに総則は適用されています。ここでは育成すべき資質・能力の三つの柱として、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」、が掲げられています。中でも「学びに向かう力・人間性等」の育成には「涵養」つまり、新しい視点で「水が自然にしみ込むように少しずつ養い育てること」が挙げられています。これが私たちが特別支援教育において目指してきたことでもあります。子どもたちが周りの温かいまなざしのもと認められ、「自己有用感」つまり、「自分が役に立っている、認められている、必要とされているという感覚」を育てることで社会参加の基礎としての「生きる力」を育成することにつなげることが望まれています。

これまで本市においては障がいのある子どもの人権尊重を図り、地域で「共に学び、共に育ち、共に生きること」を基本とした教育を推進してきました。「大阪市教育振興基本計画」でも示されている通り、様々な基礎的環境整備の施策等インクルーシブ教育システムの充実と推進に向けた取り組みが進められています。これは本市の特別支援教育が取り組んできた、個々の子どもの状況にきめ細かく対応しながら仲間と共に学ぶインクルーシブ教育を推進するというこれまでの方向性と一致するものであり、本市の教育実践の先見性、先駆性を表すものであると考えます。

今、特別支援教育は新たな段階を迎え、さらなる共生社会の形成に向けて充実と深化を求められています。学校が学びの拠点として、特別な教育的ニーズのある子どもと周りの子どもが相互に交流し学習を深めていくこと、人権教育の取組を通じて「障がい理解」を推進すること、特別支援教育を全校的な課題として職員全体で取り組むことなど様々な課題が明らかになってきました。

私たちはこれまで積み重ねられてきた成果を貴重な財産として継承するとともに、新しい時代に対応する「生きる力」の育成をめざし、教育実践・研究と発信を進めたいと思います。

研究発表 1

「 不登校からなにわ高等支援学校への進学 ~私、がんばる！～ 」

大阪市立住吉中学校 麻生詩織

大阪市立松虫中学校 辻 藤子

はじめに

大阪市立住吉中学校 2019年度 全学年3クラス 350名

特別支援学級在籍数 14名

1 Aとの出会い

小学校4年生の頃に友だち関係で、トラブルになって以来不登校になったA。保健室登校ができた時期もあったが、ほとんど登校できなかった。中学校への入学を前に小学校の担任の先生や特別支援教育コーディネーターと連携し、家庭訪問やAに関する聞き取りなどを何度も行い、Aと関係をつくっていったが、母親は無理に行かせたくない標準服を用意してくれようとはせず、物品購入もしてくれなかつた。そこで学校貸し出しの標準服やカバンを用意し「これで入学式において、待ってるよ」と、時間の確認等をし翌日の入学式を待つことにした。

入学式の朝、心配で迎えに行く途中、向こうから標準服を着て一人で歩いてくるAを見つけた。Aは「お母さん、後からくるから」とニッコリと笑い嬉しそうな顔をしていた。入学式、そして始業式に出席。順調なスタートに見えたが、それ以来ぱつぱつと登校しなくなつた。

2 くり返す家庭訪問の中で

学校に行かない理由は「自分の容姿をみていじめられるのではないか」「人に会いたくない」「男の人がこわい」「学校に行くぐらいなら死にたい」と母親に言っていた。

家庭訪問に行っても、布団から出てこず、寝て起きてこない。寝ているふりを繰り返し、起きている本人と会えたのは夏休み1日目の家庭訪問であった。後に本人の口から小学校の先生に無理やり連れていかれたことがあり、起きていると無理やり連れていかれるのではないかと思い寝たふりをしていたことを聞いた。

夏休みになったから気が楽になったと、この日をきっかけに会って話すことができるようになった。夏休み中も週に1回家庭訪問し、学校の話以外の猫の話や漫画、ゲームの話をするようになった。2学期も継続して週1回は会えた。1学期は宿題やプリントを母親に預けていたが、Aはなくしたと言って提出したことがなかつた。2学期からは家庭訪問の際に一緒に勉強することにした。また木曜日に宿題を渡して、次週の家庭訪問時までに終わらせておく約束をした。本人のやる気ができるように、好きなキャラクターや猫のイラストをたくさん活用してプリント作成をした。Aからはプリントに「おもしろかった！」などのコメントや絵で返事が返ってくるようになってきた。

2年生になると家庭訪問時には、ほぼ会えるようになり、宿題も週2回の提出ができるようになってきた。そんな中で「3年生から学校に行く！」とAが言い出し、母親と一緒に標準服や持ち物等の確認をし登校できる準備をした。

3 新たなスタート

小学校の前で待ち合わせしようと登校の約束をし、外で会う約束がはじめて成功した。それから週に1回の登校がスタート。待ち合わせ場所も小学校前から中学校正門前になりました、最後には自分でインターホンを押して、職員室まで相談室のカギを取りに来れるようになりました。別室登校が始まり、小学校からの友達が声をかけてくれるようになり、放課後には遊ぶ約束をして、小学校卒業以来、はじめて友だちと遊ぶことができた。

そして6月、山口・広島への修学旅行。小学校では修学旅行に参加できず「中学では参加したい…でも…」というAの思いを叶えるために不安を一つずつ取り除く確認（お風呂や部屋や持ち物など）をしていった。またクラスのみんなの協力で班編成をし、Aが参加しやすい体制を作った。当日参加すると、温かく迎えてくれ、クラス全員参加できたことをみんなが喜んだ。

修学旅行後も相談室登校だったが、クラスメイトが呼びに来てくれ学活や総合は教室へ入れるようになってきた。みんなと過ごすことにより授業は相談室でなく、教室の並びにある空き教室で勉強できるようになり、休み時間は友だちと一緒に過ごせるようになった。

4 卒業したら、どうする？

卒業後の進路を話す中「高校なんか行かれへん。働いたらいいねん」という母親。「Aはどうしたい？」の問い合わせに「高校行って頑張りたい」と答えた。母親とも話し普通科高校の進学も考えたが、3年間続けることを目標になにわ高等支援学校を志望した。何度も過去問題に取り組み、たくさんの先生に面接練習をしてもらった。母は「この子は絶対受からへん」と。Aは受験というプレッシャーに押しつぶされそうになっていた。しかし、「学校に行けていなかった自分だけど、なにわ高等支援学校に進学して友達を作りたい。がんばりたい。」と目標を掲げた。その結果、自分の意見や思いを話すことが苦手だったAは、自分で頑張ったことを落ち着いて面接で話すことができるまでになり、みごと合格を勝ち取ることができた。卒業式当日、大勢の人の前に出るのが苦手だったAはしっかりと返事をし、卒業証書を手に卒業していった。

5 最後に

Aへの支援には保護者をはじめ、外部機関との連携が必須であった。特に子育て支援室と連携をとりながら一緒に家庭訪問を行い、こども相談センターとの連携も子育て支援室からアプローチをしてもらえた。卒業後も子育て支援室の方が定期的に家庭訪問を行っている。

小学校時より学校に行けていない児童・生徒が、自分で進路を切り拓いていくためには、様々なサポートが必要であると思う。どうすればいいのか、なにをすればいいのか、生活背景も違えば、学力も違う。一人ひとりのニーズに合わせ、子どもに寄り添いながらチームで支援していく必要がある。まずはまわりの大人があきらめないこと、決めつけないこと。それが大事なことだとAと関わる中で、あらためて考えさせられた。

全市研究会発表 2

不登校生徒への対応についての考察

～大阪市 5 ブロックの取組と実践報告～

大阪市立東生野中学校	浅野 優
大阪市立生野中学校	左海 秀晃
大阪市立桃谷中学校	岡本 賢
大阪市立大池中学校	伊原 ゆり
大阪市立巽中学校	松田 裕貴

1. はじめに

- ・研究の動機

5 ブロックでの交流会や研究会などで、不登校生徒の増加より

2. 他都市の動向

- ・神奈川県横浜市
- ・静岡県静岡市
- ・東京都調布市

3. 不登校生徒の対応について

- ・学習指導要領

4. 5 ブロックの取組

- ・大阪市立生野中学校の実践

『学年の輪に入り込んだ通常学級在籍不登校生徒への支援学級の関わり』

- ・大阪市立桃谷中学校の実践

『不登校生徒への特別支援学級の視点でのアプローチと学級担任との連携について』

- ・大阪市立大池中学校の実践

『家庭訪問や電話連絡による連携を図り、「個別の教育支援計画」や「個別教育指導計画」を作成した。予め登校するための日程や目的を立て、個人の気持ちや体調に柔軟に対応できるようにすることで、週1回の登校が定着してきた。』

- ・大阪市立巽中学校の実践

『不登校だった生徒が、小学校の頃から本人や保護者と連携を取り、入学後の不安を軽減したことにより登校につながった。』

5. 考察

放課後等デイサービス事業所と 学校との連携について

大阪市立松虫中学校 西田智子

放課後等デイサービス事業所について

- * 創設の背景
- * 放課後等デイサービス事業所の役割
- * 対象となる子ども
- * 放課後等デイサービス事業所を利用するには

放課後等デイサービス事業所について

- * 放課後等デイサービス事業所のタイプ
- * 障害福祉サービス情報公表制度
- * 利用するための負担額
- * スタッフは

連携について

平成24年4月

- * 児童福祉法の改正による教育と福祉の一層の推進について
<文部科学省と厚生労働省>
- * 放課後等デイサービスの利用は学校教育との時間的な連携性があることから、特別支援学校等の教育課程と放課後等デイサービスにおける支援の内容との一貫性を確保するとともに、それぞれの役割分担が重要です。個々の誰がいるのある子どものニーズをふまえた放課後等の過ごし方について、特別支援学校等と放課後等デイサービス、保護者との間で十分に協議するなど必要な連携を図るようお願いします。

連携について

平成27年4月

- * 放課後等デイサークルガイドライン
　　・普及啓発の推進について（協力依頼）
　　・別紙 参照

- * 「放課後等デイサークルガイドライン」にかかる
　　普及啓発の推進について（協力依頼）
　　・別紙 参照

連携について

＜概要＞

- ① 学校との連携的な実践を行う上で、放課後等デイサークル事業所と学校との役割分担を明確にし、連携を強化すること
- ② 年間計画や行事予定等の情報を交換し、共有すること
- ③ 放課後等デイサークル事業所の運営の実態をされ、運営者が発表しないよう個人の口実をもうめざさないことがから、自分がどの時間にどの事業所の活動に参画するのかといつも把握リストや、専用情報番号を提出するルールを作成し、送迎時の方法について事前に理解すること
- ④ 下校時のトラブルや子どもの問題・施設の際の連絡体制（緊急連絡体制）を明確化マニュアル等）について、事前に理解すること
- ⑤ 学校との間で双方の役割の確認を図るために、保護者の同意を得た上で両者における教育支援計画と放課後等デイサークル事業所における支援計画を共有すること。
- ⑥ 教育的ケアの情報やり取りがあることがあつた場合の連絡手段と連絡者の間のものと連絡ノート等を通して、学校と放課後等デイサークル事業所との間で共有すること

連携して良かったことと課題

- 学校と放課後等デイサークルサービスとの役割分担
- 学校と放課後等デイサークルサービスとの情報共有
- 学校送迎時のルール確認
- 下校時のトラブルや連絡体制
- 教育支援計画の情報提供
- 行事や授業参観などへの参加
- 連絡ノートの共有
- 各種会議
- その他の連携方法

連携の強化

平成30年3月

- * 教育と体育と福祉の連携
　　・「トライアングル」プロジェクト開催
　　・文部科学省と厚生労働省

平成30年5月

- * 教育と福祉の一層の連携の実現について（連絡）
　　・文部科学省と厚生労働省

平成30年6月

- * 学校教育実施行規則の一層をめざす委員会の開催について（連絡）
　　・文部科学省

平成30年11月

- * 教育と体育と福祉の連携
　　・「トライアングル」プロジェクト
　　～誰がいるある子と家族をもっと元気に～
　　・文部科学省

URL www.tentoku.jp/p-dantotsukaisetsu_zenkisetsu_shiryou

平成31年4月

* 障がい者活躍推進プラン <文部科学省>

障がい者の社会における活躍推進に向けて
重点的に進めめる6つの政策プラン

↓ のうちの②

先達障がいの等のある子ども達の学びを支える
～教生に向けた「学び」の質の向上プラン

最後に

障がい者がとうございました。
ご清聴ありがとうございました。

選機の方法、工夫等ありましたら、お聞かせください。

矢田中学校 特別支援教育の協働体制

平田 和也

生徒数

2018年度・・・生徒数205人
特別支援学級在籍人数21人

2019年度・・・生徒数188人
特別支援学級在籍人数14人

全校生徒に対して約1割の生徒が
特別支援学級に在籍している

生活ルーム（特別支援学級）に在籍する生徒



時間割「入り込みと抽出」の現状

- 1時間に教員の数が最大8人必要な場合があり、特別支援学級担任だけでは運営できない。

協力が必要

協働体制

教科担当の面接

市立支援学校の就職支援相談

特別支援教育センター

スクールカウンセラー

学生ボランティア

スクールソーシャルワーカー

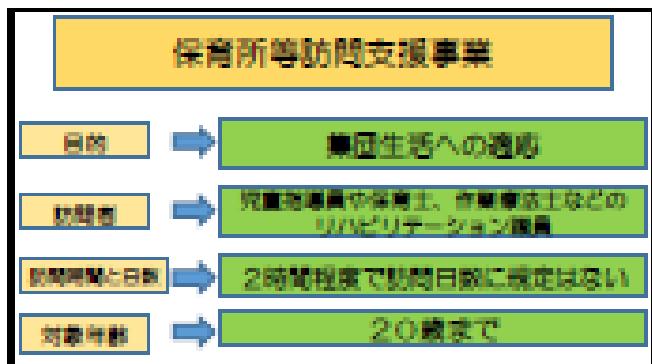
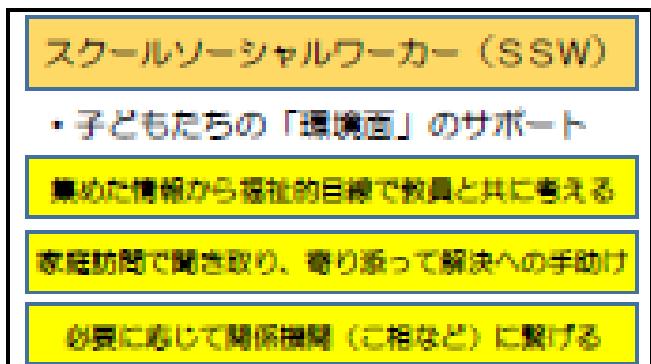
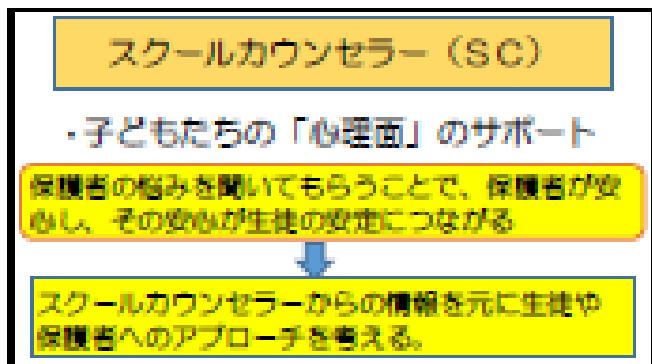
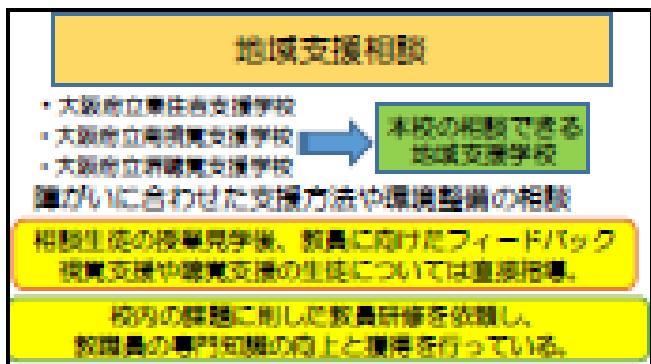
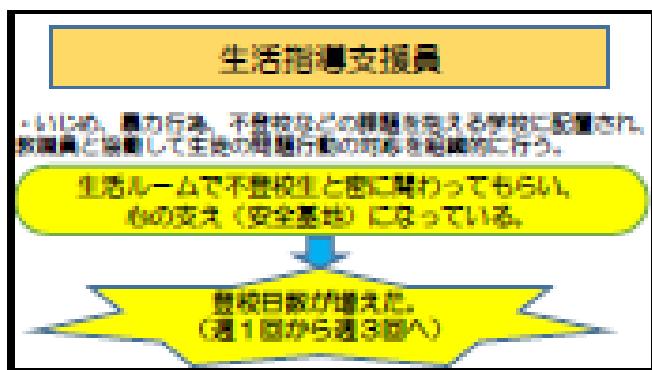
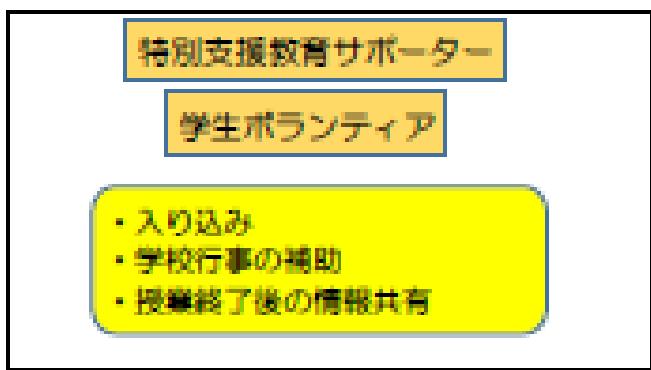
生徒指導支援員

体育館等訪問支援事業

教科担当の応援

- ・抽出授業
(通常学級で通いつけなかった教科の学力補強や
協力していただく教員の専門教科の学習)

- ・授業終了後の情報共有



保育所等訪問支援事業

支援力が高まり、高校への引き継ぎがスムーズに

保護者との信頼感

最後に

関係機関の力を活かせられるようにコーディネート

チームとして子どもに関わっていく

特別支援教育の充実

平成31年度がんばる先生支援事業〔選定番号251〕活用

「がんばる先生支援」事業活動報告

大阪市立中学校教育研究会特別支援教育部

研究コース：グループB

研究テーマ：学習指導要領によるすべての生徒の発達を支援する担当教員の実践力向上

研究の目的：

- ①学習指導要領が改定され、総則で生徒の発達の支援が打ち出され、特別支援教育においても学校全体での協力体制の必要性が示されている。
- ②障害者差別解消法への対応も含め、校内での特別支援教育担当教員の専門性と実践力がより一層求められている。
- ③一方で経験豊富なベテラン教員の大量退職期をピークアウトし、本市中学校の特別支援教育担当教員約500名中、講師と35歳以下の若手教諭は63%に上り、専門性の向上と経験の継承は喫緊の課題になっている。(昨年度状況)
- ④学校の枠を超えた全市的な教育活動と研究活動を通して、生徒の発達を多くの学校で共有するとともに、専門性や実践力を兼ね備え校内をリードできる人材を育成する。

研究の内容：

- ①全市合同の特別支援学級行事を複数実施し、多くの教員がすべての参加生徒に関わることで、校内での教育活動を超えた生徒の発達を図る。また行事の運営に多くの教員が携わり、生徒の発達に結び付く活動と共に創意企画することで、相互に実践を共有し特別支援教育の力量を高める。
- ②若手教員や経験の浅い教員への研修会（インクルーシブ・フレッシュ研修会）を開催し、専門性の向上や経験の継承を図りつつ、若手教員間のネットワーク形成やベテラン教員との連携を推進する。
- ③8月に全特連夏期セミナーを本市にて開催し、多くの教員が特別支援教育の専門的知識を学ぶと共に、運営に携わって組織運営の経験を積む。
- ④「近畿研究大会（近特連）」や「全国研究大会（全特連）」に参加し、教育研究の力量を高め日々の教育活動に反映させる。またその成果を全市的に発信し全体的な教育研究の底上げを図る。

研究の成果：

- ①ふれあい行事ではステイ・デイ共に大きなトラブルなく成功裏に終了した。また行事の実行委員に若手教員が積極的に携わり組織運営や活動管理の経験を積む機会にな

った。

- ②近特連滋賀県大会に本市中学校より分科会提案を行い他の参加者とともに研究を深めることができた。また全特連埼玉大会に若手教員 2 名を派遣し、全国の研究活動に見識を広め今後の研究活動の推進に役立てることができた。
- ③全特連主催の夏期セミナーを開催し、2 日間で延べ 270 名の参加者を得た。また開催にあたって本市中学校より延べ 50 名の教員がスタッフとして運営に携わり、今後の大規模な研究活動行事を開催運営していくノウハウの蓄積や人材の育成に資することができた。
- ④前述の研修会（インクルーシブ・フレッシュ研修会）を通算 10 回開催し延べ 100 名の参加者を得た。参加教員の満足度調査アンケートで 93%以上の肯定的回答を得た。
- ⑤活動全体を通して、若手教員の活性化と特別支援教育組織の若返りが図られ、経験の継承が着実に推進されている。35 歳以下の特別支援教育企画会役員は 4 名から 5 名に、事業担当者は 14 名から 15 名に増加し組織の若返りが進みつつある。
- ⑥研修記録、研修データ、研修レポート等は別に記載する。

今後の課題 :

- ①この研究活動を通して、特別支援教育担当の教員の専門性や実践力の向上に一定以上の効果を上げることができたと考える。しかしながら本市中学校の特別支援教育担当教員は 500 名以上おり、その規模の中では成果は限定的とも言える。
- ②学校現場において講師は研修等に出にくい状況があり、また教諭採用となった若手教員がなべて専門性向上の研鑽に意欲的とは限らないと感じられる中、ややもするとこの取組への参加者の顔ぶれが固定化されている状況が見られた。

インクルーシブ・フレッシュ研修会実施一覧

第1回	7月5日：西中学校：参加6名 ・講演（応用行動分析の基本 ABA分析とABC分析について）
近特連滋賀県大会参加	8月9日：滋賀県文化産業交流会館：参加者10名 ・近特連大会の参加体験、・記念講演と分科会での学習
全特連夏期セミナー開催	8月20日アネックスパル法円坂：参加27名 ・セミナー開催の運営と講義の受講
全特連夏期セミナー開催	8月21日アネックスパル法円坂：参加24名 ・セミナー開催の運営と講義の受講
第2回	9月6日：市民学習センター：参加8名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第3回	9月20日：市民学習センター：参加13名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第4回	9月27日：市民学習センター：参加8名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第5回	10月12日：市民学習センター：参加13名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第6回	10月19日：市民学習センター：参加11名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第7回	11月22日：市民学習センター：参加13名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第8回	11月29日：市民学習センター：参加17名 ・大阪特別支援教育振興会の特別支援教育講座の受講
第9回	1月27日：西中学校：参加7名 ・講演（私が中学生に伝えたいこと 全盲の当事者より）
第10回	2月6日：西中学校：参加3名 ・今年度を振り返って 次年度の研修に望むこと 意見交流会

・研修会登録者数：78名 ・研修会参加延べ人数：160名

インクルーシブ・フレッシュ研修会 参加レポート

インクルーシブ・フレッシュ研修を受講して

大阪市立梅香中学校 仲野 由莉香

インクルーシブ・フレッシュ研修を受講して、専門的な知識を深められ、とてもよかったです。私たちは評定をつけるわけでもなく、たまに研究授業で先生方に授業を見てもらうことはありますが、それでもかなり閉鎖的な空間で、抽出した生徒の授業を行っています。抽出する時間の使い方も、リフレッシュに使ったり、生徒のニーズと理解度に合わせた授業をしたり、運動をする時間にしたり、本当に様々です。何が生徒にとって良いのか？毎日自問自答しながら授業を行っています。この研修で、先輩の先生方の話を聞くことができ、たくさんの事例などを教えてもらうことで、私なりの授業を行えばよいのだと、安心しました。また現場で働く、同じ立場の先生方に出会え、同じ悩みを持つのだとわかり、良かったです。私は特別支援の教員ですが、以前他府県で担任をさせていただき、英語を教えていました。

特別支援の視点も大事ですが、いい意味で私は担任の先生方の視点も持てる、英語教員でもあり続けたいと強く思っています。そのために、さらに特別支援の研修で専門性を高め、同時に引き続き、授業研究を行っていきます。

3年間、専門性を高める機会や情報収集の場を設けていただき、ありがとうございました。

インクルーシブ・フレッシュ研修会 参加感想

大阪市立長谷川中学校 中塚 泰代

本校、特別支援学級の山口先生よりこの研修について、希望者はご厚意で無料参加させていただけたと聞き、9月より開催されていましたうちのどれか1つは参加したいなと思い、11/29 の最終の研修に参加させていただきました。ありがとうございました。

伊丹先生の講義はとてもユーモアもあり実体験にもとづく内容を軸に話をされていて、想像しやすくまた分かりやすい内容で、「こういう考え方、関わり方でいいんや！」と心にストンと落ちました。

また参加者の先生方の熱心さや悩みを会場で聞くことができ、たくさんの悩みを持ちながらも子どもたちに日々向き合っておられることがわかり、子どもの成長を丁寧に考えられている方々の中で話を聞けたことも嬉しかったです。

お話を聞いて一番感じたことは、学校内でも特別支援を中心に据えて運営できれば子どもはもちろん、学校内で働く者の助けになるのではないか？ということです。柔軟で

シンプルな考えは大切だと再認識できました。

当日、この研修が最終回だったと知り本当に残念でした…。もっと参加できるよう調整すれば良かったと後悔しています。また、主催者の先生や参加されておられた先生方にも声をかけていただき、温かく迎えていただいたことにも感謝しています。

ありがとうございました。

フレッシュ研修会

大阪市立旭東中学校 春名 正子

興味のある講演なので行きたいと思いながら、忙しさからなかなか参加できずで、毎回申し訳なく思っています。確実に参加できる日には参加させていただき、大変勉強になっています。どんなことでも「知っている」「聞いたことある」と「まったく知らない」では全然違うので、色んな方のお話を聞けることはありがたいです。

時間や場所など、行きにくいこともあります、この会で、繋がりを持てるることもいことだと感じています。

準備など…毎回ありがとうございました。

インクルーシブ・フレッシュ研修会参加感想

大阪市立大淀中学校 中村 茉由

今年度も参加させていただき、ありがとうございました。以下の2回の講座に参加しました。

1、 第5回 演題：インクルーシブ保育の基本と展開

講師：秋元 壽江 先生

中学校にも通じる、インクルーシブ教育についてのお話を伺いました。普段何気なくする声掛けが、子どもたちにとってどれほどの影響を与えるのかを改めて考えるきっかけになりました。映像に出てくる先生方は、環境や言葉を工夫し、研鑽を積まれておられると思いました。私自身が行っている教育を見直さなければならないと、帰り道で反省しました。“行動に言葉をそえる”という方法を実際に生徒にしてみると、“ああ、こういう風にすればよかったんだ”というほっとしたような反応が生徒からも返ってきました。生徒も一人の支援がほかの子どもたちに繋がり、誰しもが「共に育つ」ことができるよう、励みたいです。

2、 第10回 演題：すべての子どものやる気を引き出す指導法について

講師：伊丹 昌一 先生

伊丹先生の活動から、幸せな子どもを育てるという気持ちが大変よく知ることができました。どんな子どもも大人も、自分や相手の“幸せ”を想っています。日々の忙しさ

や余裕がなくなってしまって、愛なんて、勇気なんてと気持ちがすさんでしまうような日々を送っていました。まだまだネガティブな思考が払拭しきれないですが、子どもたちにポジティブな言葉をこれからもかけ続けられるよう、私自身もポジティブであることを心掛けるようになりました。この講演を聞いて、元気をいただきました。

来年度もぜひ参加をと考えておりましたが、今年度で最後と聞き、とても残念です。参加させていただき、本当にありがとうございました。

インクルーシブ・フレッシュ研修会参加感想

大阪市立董中学校 浦田 世津子

本年度もインクルーシブ・フレッシュ研修会に参加させて頂き、ありがとうございました。

個々の成長や状態により、生徒一人ひとりを大切に考え、個々の状態やニーズに応じたきめ細かな指導を日頃より心がけ、生徒や保護者と接してきています。勿論、校内でも生徒に関する情報を教員間で共有し、よりよい指導のための相談や協力も得ています。しかし、インクルーシブ・フレッシュ研修会で他校の先生方の話を聞くことや、情報を交換することにより得るものもとても大きいと感じています。違った角度からの見解や実際に指導された経験に基づく助言が、私自身の学びになっています。その学んだことが、直接、生徒と保護者へのきめ細かな指導に反映していると思います。ニーズが一人ひとり違う中、私自身の質を高め、より柔軟に指導・対応できるようになることが、直接的に生徒や保護者に有益な形で還ると思っています。また、インクルーシブ・フレッシュ研修会から夏の特別支援教育夏期セミナーや全特連の近畿大会に参加させていただくことで、大阪市以外の他府県の教員の先生方の研究発表を聞く機会も得ることができ、学びがさらに広がり、とても感謝しています。

大阪特別支援教育振興会主催の講座では、本年度も発達支援のエキスパートとして活躍されている大学の先生方の実践的講義やご自身やご家族の経験に基づく話を伺うことができました。医学的な見解を聞く機会はなかなかないので、とても有意義で深い学びにつながりました。数年にわたり貴重な講座を開講して下さっていた『大阪特別支援教育振興会』が本年度で解散されるということが、非常に残念です。

今年度も様々な学びの機会を頂きまして、ありがとうございました。貴重な学びを自分で留めることなく、自校に持ち帰り、他の先生方とも共有させて頂いています。大阪市の特別支援教育がよりよいものになるように、これからも一層の努力を積み重ねていきたいと思います。